

The Bilingual Child: Early Development and Language Contact

by Virginia Yip and Stephen Matthews. 2007.

Cambridge University Press.

森(三品) 聡美

MISHINA-MORI Satomi

本書は、香港在住の英語と広東語のバイリンガル幼児（1-4歳前後）6人の統語発達を、言語接触現象との比較という視点を取り入れながら理論的かつ実践的に検証し、個人レベルでの言語発達と社会レベルの現象である言語接触との密接な関連性について追究したものである。およそ10年間をかけて筆者ら自身の子を含む6人の幼児の発話データを集め膨大な言語コーパス（香港バイリンガル幼児コーパス）を築き上げ、それに基づき統語発達を詳細に分析した、YipとMatthewsによるバイリンガル研究の集大成である。この本が取り組む研究課題は、現在の幼児バイリンガルの言語発達研究において最も中心的な課題を含む以下の3つである：1）バイリンガルの言語発達は、それぞれの言語を学ぶモノリンガル児の言語発達とどのように異なるのか、2）その二言語はそれぞれ独立して発達するのか、あるいは体系的に影響し合うのか、そして3）バイリンガル児の発達過程にある言語の特徴は、言語習得ならびに言語接触の一般的プロセスについての理解にどのように貢献するのか。

まずは本書の構成であるが、第一章は序論、第二章は理論的枠組み、第三章は方法論を扱う。第四章から七章までは、バイリンガル児の統語上の言語間転移についての研究報告で、うち四章から六章は広東語から英語への影響、ならびに広東語からの影響が大きいとされる口語シンガポール英語との共通点について、そして七章では英語から広東語あるいは両方向の影響について扱っている。第八章は言語接触と言語習得との関係について論じ、第九章で総括をする。

第二章では、バイリンガル児の統語発達研究を説明するために必要な理論的枠組について概説している。まず最も根本的な問題として、いわゆるバイリンガル児の言語発達とモノリンガル児の第二言語習得とをどのように区別するのかについてこれまでの議論をまとめている。次に、言語獲得研究における重要な問題である「論理的問題」— 不完全なインプットからほぼ完全な文法体系を教えられることなく習得できるのはなぜか — に、二言語の「不完全な」インプットを受けるバイリンガルの言語発達研究がどのような貢献が可能かを述べている。そして同時バイリンガル研究の中心的課題であり本書の課題でもある言語間の影響と、それを説明する要因について述

べ、さらにバイリンガルの言語を接触言語の一つとみなす考え方についての議論を紹介している。

第三章は方法論ならびに研究手順の紹介である。バイリンガルの言語発達研究がこれまで用いてきた手法の長所と短所をふまえ、本研究ではケーススタディ方式をとり、6人の子どものそれぞれ1-2年間分の自然発話の縦断的コーパスデータを用いる。それに加え、筆者らの子である3人についてはコーパスでは拾いきれない発話の記録が可能な両親による日記データも作成し、コーパスを補う形となっている。子ども達は皆一人一言語方式の環境下で育てられているが、うち4人は広東語が優勢、1人は英語が強く、もう1人は極めてバランスのとれたバイリンガルである。

第四章はwh疑問文の転移についてである。英語では疑問詞はwh移動を経て文頭に位置するが、広東語では疑問詞は平叙文における対応する語と同じ位置（元位置）に置かれる。この違いが転移を起す引き金となり、広東語が優勢な子ども達の場合広東語の特徴が英語の発話にそのまま反映され、英語の発話においても疑問詞が文頭でなく元位置に置かれるという現象が多くみられることがデータから明らかになった。これは英語のモノリンガル児の発話には見られない構造で、明らかに広東語からの影響だといえる。筆者はこの転移を説明する最大の要因は言語的優勢であると主張する。その証拠として、ほぼ均衡バイリンガルであるKathrynと英語が優勢であるCharlotteにはこのような発話は見られなかったことを挙げている。また、英語におけるインプットの曖昧性—英語には疑問詞が元位置にある（広東語と表面上同じ語順となる）問い返し疑問文と、疑問詞が文頭に来る通常の疑問文の両者がインプットに存在すること—が、一貫して疑問詞が元位置にある広東語の影響を受けやすくしているという仮説とも一致していると論じている。更に、これらのバイリンガル児の発達上の特徴が、広東語をベースとしている口語シンガポール英語ならびに中国ピジン英語と類似していることを例示し、個人内ならびに社会的な言語接触が類似したメカニズムによって生じていることを提案している。

第五章では目的語の省略を扱っている。英語では動詞の項（主語、目的語）は基本的に省略不可である一方で広東語では省略可能であるが、バイリンガルの子子ども達は英語のモノリンガル児に比べて目的語をより頻繁に、そしてその発達過程においてより長い期間省略することが示された。従ってここでもやはり広東語から英語への影響が見られる。この説明としては、第四章同様に子ども達が広東語優勢であることと、インプットの曖昧性を提案している。特に、広東語の影響を受けた他の構造（wh疑問文など）に比べて項の省略の使用が長引くことについて、英語のインプットの曖昧性（目的語が必須である動詞とそうでない動詞が存在し、その区別が非常に見極めにくいこと）が主たる原因であると論じている。更に、この現象と同じものが口語シンガポール英語にも見られることを示している。

第六章は関係節の転移についてである。英語では関係節は後置修飾、広東語では前置修飾であるが、バイリンガル児の英語の発話には、特に目的語の関係節においてモノリンガル児の発話には見られない前置修飾がかなりの頻度で見られた。これも筆者は広東語からの転移であるとし、第四、五章同様に広東語が優勢であることと、インプットの曖昧性で説明できるとしている。英

語では名詞の修飾については形容詞が前置修飾、関係節が後置修飾で一貫していない一方で、広東語ではどちらも前置修飾であることから、広東語の影響を受けやすい土壌を作っているとの見方を示している。また、ここでも口語シンガポール英語との共通点について触れている。

第七章では、優勢言語の有無に関わらず言語間の影響を受けやすい構造についてである。英語のほうが弱い子ども達でも、広東語の所格 (at) 前置詞句ならびに give を使った与格構文においては英語の語順が広東語に反映される転移が生ずる。また、句動詞 (verb-particle construction) においては両方向に影響し合うことが観察されている。必ずしも優勢言語がそうでない言語に影響を及ぼすのではなく、特定の構造においてはその逆もあり得ることを示すことは極めて重要なことだ。均衡バイリンガルの子どもの中心とする研究においては、転移が見られた場合は言語的優勢では説明ができず、構造そのものに起因する、内的要因で説明される。それがこの章のタイトルでもある「影響の受けやすさ」(vulnerability) であるが、このような構造的原因による転移が、偏重バイリンガル児においても観察されることは極めて興味深いことで、構造上の「影響の受けやすさ」が二言語の言語能力のバランスと関わりのない要因であることがより強調されたことになろう。

第八章では言語接触における文法化とそれに対応するバイリンガル児の言語発達について比較しながらこの二者の関連性の高さを論じている。完了相を表す語として発達する already、受動の意味を表す give, そして名詞化の機能をもつ one を挙げ、バイリンガル児が二つの文法を獲得する過程で、中国語の影響を受けて発達したシンガポール英語にみられる文法化現象をいわば再現していると主張する。これは、同時バイリンガルの言語発達が接触言語の発達においてみられる基層言語からの影響と同質のものであることを示唆している。

本書の最も顕著な特徴は、対立する各種理論について筆者らが中立的な立場を示し、統合的なアプローチをとっていることである。例えば言語発達についての基本的な考え方 — 人間に生得的に備わっているとされる言語の本能が言語固有のものか人間の認知全般に関わるものなのか — についても、通常どちらかの立場をとる学者が多い中、筆者らはこの問題は未解決であるとしてどちらの立場も選ばない。また、子どもの発話の統語構造の分析についても、生成文法と類型論両者の理論を併用しており、それはそれぞれが得意とする分析対象があり、それ故に両者は補い合うことができるという考え方をとる。更に、言語発達におけるインプットが果たす役割については異なるパラダイムにおいて明白な対立がある中、これまでインプットにあまり重きを置かない傾向にあった言語生得説に基く生成文法のアプローチを批判し、枠組みに関わらずインプットの影響を考慮に入れるべきであると主張している。統語の獲得に欠かせないトリガーの源としてのインプットが言語習得過程の理解に不可欠である、という提言は説得力がある。実際に本書では、統語発達の研究に理論的アプローチと経験的アプローチとをバランスよく取り入れている。このように一つのパラダイムに固執しない立場をとる明確な理由は述べられていないが、おそらくバイリンガルの統語発達を説明するためには、これまでのように一つの理論、一つの領域のみでの説明では限界があるからではないかと思われる。例えば近年の研究では生得説のみでは説明

のつかない言語間の影響を目の当たりにしてきており、言語環境を考慮に入れずに説明をするのは限界があることが研究者の間で実感されつつある。従って、本書にみられる統合的なアプローチは、これからの言語習得研究全般に影響を及ぼすものと考えられる。

本書の最も重要な貢献は、個人レベルでの現象であるバイリンガルの言語発達と社会レベルでの現象である言語接触との共通点を綿密な手法で証明し、二言語習得のメカニズムを解明することにより、これまで「不可解」とも形容されてきた接触言語が生じるメカニズムを提案していることにある。言語接触と言語習得（主に第二言語習得）の分野を結びつけて考えることはこれまでも一部の研究者の間では行われてきた（Schumann, 1978, Bickerton, 1981, Andersen, 1983）が、同時バイリンガル児の研究においては新鮮な切り口であり、今後の発展が期待される。

また、これまであまり注目されなかった二言語獲得における言語的優勢の果たす役割について取り上げ、その重要性を認識させたという点も注目すべきであろう。同時バイリンガル児の研究は主に均衡バイリンガルについてのものが多く、二言語能力の不均衡が見られたとしてもそれを考慮に入れることは少なく、あくまで同じ「同時バイリンガル」として扱った研究がほとんどである。しかし、筆者達は見落とされてきたバイリンガル児の現実 — 実際はどちらかの言語がもう片方より優勢である — を強調し、その不均衡な言語能力、言語発達を綿密に追求したことは評価すべきだろう。

更に、本書でも指摘があるように、バイリンガル児の言語発達研究はそのほとんどがインドヨーロッパ言語のペアを習得する子どもたちのもので、構造が根本的に異なる二言語の研究は数少ない。その中で、アジア言語である広東語とインドヨーロッパ語族に属する英語を同時習得する幼児のコーパスを作成し、それに基づく広範囲かつ詳細な分析を行った本研究は、バイリンガル研究における調査対象の偏りを是正し、より広い視野で二言語発達の特徴を理解するために大きな貢献をしたといえよう。

このようにあらゆる面でインパクトの大きい研究であり、取り上げている各文法項目についても分析が綿密で議論がほぼし尽くされているが、若干の弱点も指摘しておきたい。まずは、転移がみられないケースについての説明が欠けていることである。均衡バイリンガルである Kathryn のデータには転移がない場合が多い。本書では、Kathryn のデータは言語的優勢が転移の原因であることを主張するための比較対象としか扱っておらず、なぜ均衡バイリンガルの場合転移が見られなかったのかについての説明がなされていない。転移が生じる原因として、言語的優勢以外にインプットの曖昧性なども本書で指摘されているが、同じ条件下でなぜ転移がみられない子がいるのか、均衡バイリンガルを扱った他の研究との比較などをいれながら考察する必要があるだろう。

また、項の省略が長引く原因としてインプットの曖昧性と言語的優勢を挙げているところには疑問を覚える。これは言語間の影響が起こる原因として他の統語構造（wh 疑問文、関係節）でも同じように指摘されていることで、項の省略がなぜこれらの構造に比べて習得が遅れるのかの説明になっていない。むしろこれは、項の省略が統語のみでなく語用論の領域とも関連するから

ではないかと考えられる。項の省略は、統語と語用論が交差する領域であり、両領域での処理が必要になるためにモノリンガルでも習得が遅れる項目である。そのためバイリンガルの言語発達においても言語間の影響が生じやすい項目であるとされており、実際に、優勢言語の有無に関わらず言語間の影響が見られることが報告されている (Muller & Hulk, 2001; Serratrice et al, 2004)。この点も考慮に加えればこの構造がより長く使われターゲット構造の獲得が遅れることをよりの確に説明できるのではないだろうか。

この本は、言語学、応用言語学、そして外国語教育にかかわる多くの日本の研究者達に是非一読していただきたい。それは、研究そのものが興味深いだけでなく、筆者らが繰り返し主張するバイリンガルの言語能力の本質と、それが示唆することがより多くの研究者に理解されるべきだと考えるからである。筆者らは Grosjean (1989) を引用し、バイリンガルの言語能力について、二人の完全な、あるいは不完全なモノリンガルが一人の人間になっているのではなく、彼らの言語には固有の特徴があると述べている。実際に本書で明らかになったことは、バイリンガル児は二言語をそれぞれのモノリンガル児と同じように習得するわけではなく、二言語接触の過程で起きる様々なプロセスを経て特有の言語発達を遂げていくということである。そして更に、その特徴が世界各地に見られる接触言語が生ずる過程とかなり似通っているということである。これらが示唆していることは、バイリンガル (あるいはマルチリンガル) は、モノリンガルに比べて何かが欠如しているわけではなく、あくまで異なる言語能力をもつ人々である、ということではないだろうか。公式にも実際の言語使用においてもほぼモノリンガルである日本では、バイリンガルというと、羨望のまなざしで見られる一方で、どちらかの言語が不完全、あるいは両方とも不完全である、そしてそれによって自己のアイデンティティも見失われる危険性があるとまで危惧されることもある。しかし、二言語使用がより一般的である多くのコミュニティを考慮に入れたより広い視点からみればそれは現実にそぐわない考え方であるともいえる。少なくとも世界の言語使用の現実を見れば、筆者らが繰り返し主張は否定し難いものであろう。グローバル化が進む中、言語接触の機会は益々増え、二つ以上の言語を常用する人口はモノリンガルの人口をはるかに上回ることだろう。そのような中、少なくとも研究者の中では、バイリンガルについて科学的根拠に基づいた正確な理解をすることは極めて重要なことだ。そのためにも本書は多大なる貢献をするはずである。

参考文献

- Andersen, R. W. 1983. *Pidginization and Creolization as Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.
- Bickerton, D. 1981. *Roots of Language*. Ann Arbor: Karoma.
- Grosjean, F. 1989. Neurolinguists, beware! The bilingual is not two monolinguals in one person. *Brain and Language* 36: 3-15.
- Muller, N. & Hulk, A. C. 2001. Crosslinguistic influence in bilingual language acquisition: Italian

- and French as recipient languages. *Bilingualism: Language and Cognition* 4(1): 1–21.
- Schumann, J. H. 1978. *The Pidginization Process: A Model for Second Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.
- Serratrice, L., Sorace, A., & Paoli, S. 2004. Crosslinguistic influence at the syntax-pragmatics interface: Subjects and objects in English-Italian bilingual and monolingual acquisition. *Bilingualism: Language and Cognition* 7(3): 183–205.